Osaka University Knowledge Archive

Title	環境問題のグローバル・マネジメントに関する民族誌的研究ー黄砂・黄土・植林を読みかえるー
Author(s)	深尾, 葉子
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/69255
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　深尾葉子　）	
論文題名	環境問題のグローバル・マネジメントに関する民族誌的研究 ―黄砂・黄土・植林を読みかえる―

論文内容の要旨

本論は、グローバルな規模で生じている環境問題をどのようにマネジメントすれば良いかに関する学際的方法論研究である。分析対象として、中国内陸部を中心に発生し、日本にも多大な影響を及ぼしている「黄砂」を取り上げ、その事例分析を通じて、単に環境問題に留まらず、グローバル・マネジメントそのものの議論の進化を目指している。

マネジメントという概念は往々にして、何らかの境界を想定し、その「内部」の管理を如何に行うかという問題として理解される。しかし、環境問題に関して言えば、その原因も結果も、扱う対象もマネジメントとして操作可能な範囲を超えることがほとんどであり、その効果を上げようとすれば、境界の向こう側、すなわち「外部」への関与が必然となる。そこでは、「組織」「地域」「国」などの意図的・意識的に画定された境界を越えて、外部事象への積極的な関与のみならず、異なる文化や価値観を有する人々とその社会に対するコミットメントが求められる。あるいはまた、知識ベースの観点に立てば、境界の向こう側には、異なる知識、技術、ノウハウが存在し、それらに対する理解のみならず、既存の解釈枠組みからの超越が求められる。この超越こそ、グローバル・マネジメントにおける新たなイノベーションを創発させる可能性を秘めている。

本論でとりあげる「黄砂」は、中国内陸部で発生し、日本に海を越えて飛来する典型的な「越境環境汚染」問題である。また、日本でも黄砂対策としてさまざまな観測データの収拾と分析、砂漠化防止のための緑化事業、フィルターや汚染除去のための対策など、政府・民間いずれのレベルでも多様な取り組みが行われている。しかしながら、日本で提供されている黄砂情報や、植林などの活動には、多くの誤解と問題点が含まれている。そうした誤謬が生み出される構造と、それを乗り越えるための示唆を具体的に論じる。

本論の構成は次の通りである。「はじめに」において、環境問題のグローバル・マネジメントとは何かについて考察する。次に「第一部　黄砂・黄土・植林をめぐるバイアス」では、日本の黄砂情報と黄砂をめぐる誤解（第一章）、黄砂とは何か、どこから来るのか（第二章）、砂漠緑化の功罪（第三章）、について詳論する。第一部における論点は、境界内における既存の解釈枠組み（フレーム）によって、黄砂や黄土、砂漠化防止策としての植林についての認識が歪められ、対策を誤らせる原因になっていることを具体的な事例を挙げて例証することである。続く「第二部　黄砂の発生する地域における人と自然の関わり」においては、里山としての黄土高原（第四章）、黄土高原の空間構造とコミュニケーションのダイナミクス（第五章）、黄土高原における「交換」と人間関係の形成機構（第六章）人間のコミュニケーションが生み出す「緑」（第七章）、人間社会と生態系回復の相互作用（第八章）、プロジェクトの予測不可能性（第九章）を論ずる。第二部の要点は、人間の関わる空間としての黄土高原で生態系を回復するためには、まず人間のコミュニケーション・システムへの働きかけが重要であること、人々が行為を紡ぎだすコンテキストへの働きかけが必要であることを具体的な事例を通じて論ずることである。

最後に、「おわりに」として開かれた語りとしてのグローバル・マネジメントについて全体を俯瞰して議論を深めるにあたり、「フレーミング、リフレーミング、デフレーミング、アウトフレーミング」という概念を提示する。グローバル・マネジメントにおいて本質的に求められるのは、境界を越えるマネジメントであり、そのためには、既存の解釈枠組み（フレーム）に拘泥するのではなく、それらをリフレーミング（再構築）し、さらに必要となれば、デフレーミング（脱構築）あるいはアウトフレーミング（超越）していくことが求められる。枠組みあるいは認識の歪みをいかに乗り越えながら境界の外側に働きかけることができるのか、その方法と意義を明らかにする。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（深尾　葉子）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教 授	大西　匡光
	副 査　教 授	松村　真宏
	副 査　准教授	中川　功一

論文審査の結果の要旨

論文内容の要旨

本論文は、グローバルな規模で生じている環境問題をどのようにマネジメントすれば良いのか、という問いへの学際的方法論研究で、申請者自身の２７年間の長期間にわたる、多数の回数に及ぶ中国での実地調査に基づいた研究成果を纏めたもので、二部、全十章から構成されている。

本論文で取り上げる「黄砂」は、中国内陸部で発生し、日本に海を越えて飛来する典型的な「越境環境汚染」問題である。しかし、日本で提供されている黄砂情報や、植林などの活動には、多くの誤解と問題点が含まれている。そうした誤謬が生み出される構造と、それを乗り越えるための手法を、具体的に論じている。

「はじめに」では、環境問題のグローバル・マネジメントとは何かについて概観している。

「第一部　黄砂・黄土・植林をめぐるバイアス」は、日本の黄砂情報と黄砂をめぐる誤解（第一章）、黄砂とは何か、どこから来るのか（第二章）、砂漠緑化の功罪（第三章）、からなる。第一部は、既存の解釈枠組み（フレーム）によって、黄砂や黄土、砂漠化防止策としての植林についての認識が歪められ、対策を誤らせる原因になっていることを具体的な事例を挙げて例証している。

「第二部　黄砂の発生する地域における人と自然の関わり」は、里山としての黄土高原（第四章）、黄土高原の空間構造とコミュニケーションのダイナミクス（第五章）、黄土高原における「交換」と人間関係の形成機構（第六章）、人間のコミュニケーションが生み出す「緑」（第七章）、人間社会と生態系回復の相互作用（第八章）、プロジェクトの予測不可能性（第九章）からなる。第二部の要点は、人間の関わる空間としての黄土高原で生態系を回復するためには、人間のコミュニケーション・システムへの働きかけが重要であること、人々が行為を紡ぎだすコンテキストへの働きかけが必要であることを、事例を通じて明らかにする。最後に、開かれた語りとしてのグローバル・マネジメント（第十章）では「フレーミング、リフレーミング、デフレーミング、アウトフレーミング」の重要性を説く。グローバル・マネジメントにおいて本質的に求められるのは、境界を越えるマネジメントであり、そのためには、既存の解釈枠組み（フレーム）に拘泥するのではなく、それらをリフレーミング（再構築）し、さらにはアウトフレーミング（超越）していくことが求められると主張している。さらに、枠組みあるいは認識の歪みをいかに乗り越えながら境界の外側に働きかけることができるのか、その方法と意義を明らかにしようとしている。

論文審査の結果

本論文は、グローバルな規模で生じている環境問題をどのようにマネジメントすれば良いのか、という問いへの学際的方法論研究で、申請者自身の２７年間の長期間にわたる、多数の回数に及ぶ中国での実地調査に基づいた研究成果を纏めたもので、得られた知見は貴重で，それらに基づく主張は説得力を持つと感ぜられる。記述の一部に、より多くの客観的証拠による裏打ちが求められる箇所があること、「フレーミング、リフレーミング、デフレーミング、アウトフレーミング」に関する議論については、より深い精察が期待されること、等の不満はあるものの、審査委員会は、それらを差し引いても、本論文は博士（経営学）を授与するに十分値するものと判断する。